

## コロナ禍における教育運営状況の一考察 ー長崎大学の授業アンケート分析よりー

太田 啓介

長崎大学大学教育イノベーションセンター 教学 IR 部門

### A Study of Educational Management Situation in COVID19 From the Analysis of Class Questionnaire at Nagasaki University

Keisuke OTA

Center for Educational Innovation, Nagasaki University

#### Abstract

This paper discusses the current educational management of Nagasaki University based on the analysis of class questionnaires.

In the 2020 academic year, the global epidemic of COVID-19 forced many universities to change their teaching styles. The rapid change from face-to-face classes to online classes has had a tremendous impact on students' learning. As a result, the results of class questionnaires, which reflect the status of learning, are also expected to show some indexical changes.

In this paper, we will analyze the results of the class questionnaire to see what part of each indicator has changed. Next, by comprehensively judging the multiple indicators obtained from the analysis results, we will examine the current state of educational management. Although this analysis is different from conventional statistical analysis, such as deriving what students want from each class, it can be expected to be used in other surveys as an example of comprehensive analysis. In addition, by proposing a specific analysis method for the use of class questionnaires, which is still insufficient at this university, it is expected to make a certain contribution to the improvement of learning and teaching.

Key Words : Class Questionnaires, Educational Management, Teaching styles,  
Online Classes, COVID19

#### 1. はじめに

本年度（2020 年度）は、新型コロナウイルスの世界的な流行により、多くの大学が従来の対面授業からオンライン授業へ授業形態の変革を余儀なくされた。

当感染症の流行は、時節によって感染者の増減を繰り返し、2020 年度現在、収束には程遠い状態である。長崎大学（以下、本学）への影響も当然ながら甚大であり、多くの学生や教職員が授業形態の変化に今なお苦悩している。コロナ禍という劇的な環境変化は、学生を取り巻く生活環境を一

変させたばかりではなく、彼らの学修状況にも多大な影響を与えた。

本稿では、これらの外的変化が学修過程に及ぼすであろう影響について考える。具体的には、2020 年度授業アンケートの指標に何らかの変化があることを想定する。そのような想定の上で、授業アンケートを過年度分も含めて分析し、影響を受けたとみられる指標を特定する。最終的には、分析結果を総合的に検討することで、本学の教育運営がどのような状況にあるかを検討する。

本稿の分析意義は以下となる。一つには、限られた側面とはなるものの、未曾有の環境下にある現状を分析して把握することが、教学マネジメントを振り返る今後の一参照点となり得る。

二つ目には、本学における授業アンケートの活用は未だ十分とは言えないため、具体的な分析手法とともに得られた知見を示すことが、今後の学修改善や授業改善にとっても寄与できるものとなる。

### 1.1 授業評価から授業アンケートへ

本学では、2016年度以前まで授業内容や授業方法を継続的に改善することを目的とした、「授業評価アンケート」を実施してきた。2007、2008年に文部科学省によりFD活動が義務化されて以降、様々な組織的FD活動が実践されてきたが、授業評価アンケートはこれらの諸活動における代表的な取り組みの一つであった。

それまでの授業評価アンケートは、その名が示すとおり学生からの授業の感想や評価を把握することが目的であった。これに対し、2017年度からは各学生による学修活動の省察を促しながら、同時に授業改善へつなげることを主目的とした、「授業アンケート」に変更された。

教育の質保証と情報公表については、本学でも早くからその仕組みについて検討がなされてきた。特に2014年度、「大学教育再生加速プログラム」

のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）とテーマⅡ（学修成果の可視化）の複合型に採択されて以降、これに牽引される形で、全学的な教学マネジメントシステムを再構築し、運用ベースへシフトさせるべく様々な取り組みを行ってきた。

結果として、図1の本学教学マネジメント概念図からもわかるように、現状の授業アンケートが学生の学修成果を把握すると共に教育活動の見直しに適切に活用されるための中心的要素となったことがわかる。

以上のように、授業評価アンケートから授業アンケートへの変更に伴う一連の変遷は、教学マネジメントの観点から鑑みても本学の教育運営にとって必要不可欠な取り組みであった。

### 1.2 教学IRを主体とした分析体制と課題

本学の教学IR部門は、現在センター（大学教育イノベーションセンター）教員とテクニカルスタッフ2名による3名体制で業務を推進している。

各々の分析環境がスタンドアロン仕様となっている部分が大きな特徴であり、相互の分析連携や事前クリーニングは共有サーバ内で行われる。

基本的には、個々のIDを主キーにしながら様々なデータとの結合が可能となっている。また、このスタンドアロン環境と連携機能が利点となり、通常行われるようなデータベース化やIDの暗号化といった事前整備を特に行わなくても十分な対応が可能となっている。

分析手法に関しては、2019年度以降、従来の統計型ファクトから、BIツールを主体とした視覚型ファクトへ移行した。BIツールは、様々なデータについて、その種類を問わずに容易な連結を可能としており、また分析についても詳細なドリルダウンを素早く行えるという利点がある。つまり、本学の教学IRが従来行ってきた分析活動よりも、正確性や粒度の点でより高度なデータハンドリングが可能になったといえる。

これらの変革は、今日の急速に変化しながら多様な状況を示す外環境（例えば2020年度の新型コロナ感染症）にも適応できる手法であり、詳細な分析から得られる仮説の提起は、関係機関の意思決定にも大きく寄与するものとなっている（図2）。

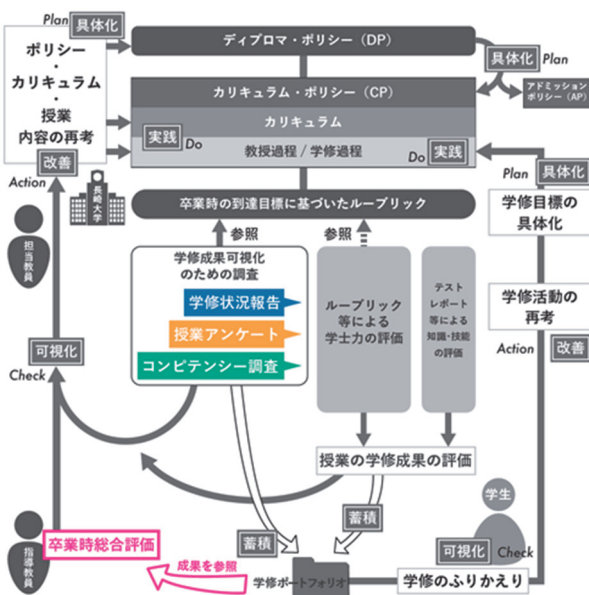


図1：長崎大学の教学マネジメント

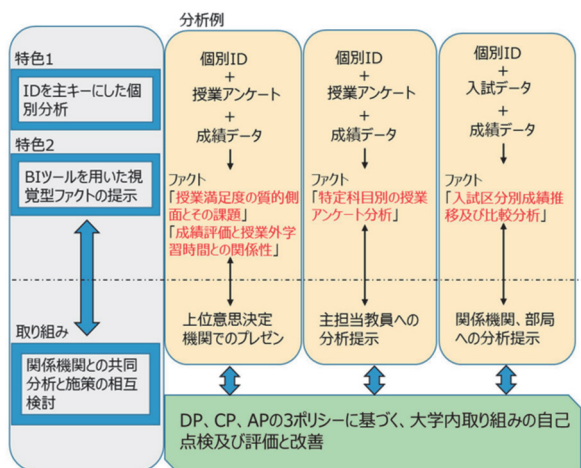


図2：教学IR部門の特色と分析例

分析手法の変革に伴い、業務効率は飛躍的に向上した。一方で、顕在化した課題もある。一つには、マスタデータの不備である。本学には、履修登録やシラバスの参照、また成績や掲示機能が確認できるNU-Webシステムと呼ばれる学務情報システムが構築されている。各部局において、このNU-Webシステムの運用状況が異なる部分があるため、状況によってデータに欠損が生じている。

次に、連結の主キーとなる科目IDの統合が不十分な点である。例えば、新カリキュラムと旧カリキュラムで2つのIDが発生するといった、同一の科目にも関わらず親キーを持たずに複数の子IDが派生している状況は分析上の課題となっている。

これらの課題は、教学IR部門の組織的能力が向上する過程と共に徐々に明らかになってきた。上記のように、データが不十分であるということは正確なエビデンスを抽出できないことと同義であるため、教育の質保証を十分に担保するためにも全学的な協力体制をベースとした改善の検討が必要とされる。

## 2. 授業アンケートの概要

### 2.1 授業アンケートの構成

本学の授業アンケートの実施形態と設問構成について以下に述べる。

本学の授業アンケートは、学務情報システムであるNU-Webシステムを利用して、オンラインで実施されている。以前は紙媒体の調査であったた

めに開講全科目に対して実施することができなかった。対して、授業アンケートでは開講全科目で実施展開することができ、分析幅の拡大や確度の向上が期待できる。実施区分は各年度とも年4回の実施となり（表1）、日程については前年度までに教務委員会を通して決定される。

表1：本学の授業アンケート実施区分

①	1 クォーター授業アンケート
②	2 クォーター・前期授業アンケート
③	3 クォーター授業アンケート
④	4 クォーター・後期授業アンケート

設問構成は、まず学生が授業へ取り組む態度や、獲得した学修成果への自己評価について選択式で問いかけている。次に、施設の設備環境や授業改善のための意見を問う自由記述式が一連の共通項目として設定されている（表2）。

表2：本学の授業アンケート設問概要

設問	形式	設問概要
1	選択式	授業の満足度
2	選択式	シラバスの理解度
3	選択式	成績目標
4	選択式	課題への意欲
5	選択式	週平均の授業外学修時間
6	選択式	学修への主体的取り組み具合
7	選択式	協働・ディスカッション
8	選択式	授業を通じた自身の行動への影響
9	記述式	教室や環境で困ったこと
10	記述式	授業で良かった点
11	記述式	授業で改善した方がよいと思う点

また、部局や科目群によって年度毎に検討された個別の追加設問を設定することも可能となっている。ただし、本稿の分析については全学に一律となる共通項目を対象とするため、部局別に設定された追加項目の分析については別の機会とする。

### 2.2 対象者と回答状況

本学の授業アンケートは、大学院を含む全学の学生や院生を対象として行われている。授業アンケートが開始された2017年度以降の回答率実績（大学院含む）については表3のとおりである。

表3を見ると2017年度の導入当初、回答率は全学で20%代と芳しくなかったものの、その後は

年々上昇していることが分かる。また、対象者数については年度による差がほとんどないが、科目数は 2020 年度に大きく減少している。これは、成績認定等の授業アンケート実施に直接該当しない科目を精査したことが影響している。

回答率の上昇は、授業アンケートの認知度が上がるにつれて学生が積極的に取り組んだ結果であり、それ以外にも、前述のような実務運用上の見直しによる各部局間の協力体制も大きな要因となっている。

表 3：授業アンケート年度別回答率（全学）

	2017	2018	2019	2020
科目数	8,327	10,091	8,806	5,768
履修者数	159,183	158,253	162,539	154,763
回答者数	32,782	44,979	61,827	100,879
回答率	20.6%	28.4%	38.0%	65.2%

### 3. 分析

本章では、授業アンケートの各設問について分析を行う。分析については、2017 年度より 2020 年度の 4 年間を比較する。また、本稿では分析焦点を絞るため学部生のみを対象とし、大学院生については別の機会とする。さらに、設問については表 2、設問 8 までの全学共通の選択式項目を分析対象として、記述式や追加項目は含めない。

#### 3.1 全学的な授業満足度の推移

はじめに、設問 1 をもとに各科目ベースの満足度について学部全体の年度別推移を示す。

図 3 をみると 2020 年度の学部平均満足度は 4.13 となっており、これは 2019 年度より 0.01 ポイント下回るものの、他の 3 年度と比較しても大きな差は見られない。よって、新型コロナウイルスによる大きな環境変化があったにも関わらず、全学的な観点では満足度の指標に大きな影響がなかったことがわかる。

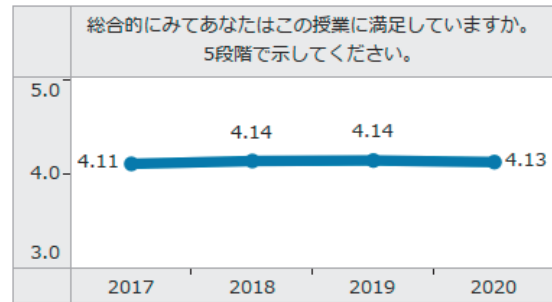


図 3：年度別の満足度推移（学部全体、平均）

#### 3.2 オンライン化による影響

続いて授業形態別の満足度について分析する。前述のように、2020 年度は新型コロナウイルスの流行に伴い授業のオンライン化が急速に進んだ。これらの授業形態の変化は、授業満足度にも少なからず影響していると推測される。

ここでは、2020 年度後半に本学が独自に実施した、「コロナ禍における授業実施状況調査（以下、授業実施状況調査）」から各科目の授業形態を問う設問を援用する。授業実施状況調査では、3 クォーターの科目に対してその授業形態を質問した。よって、この回答結果を授業アンケートの結果と結合して分析した。

第 3 クォーターという限定された学期区分、なおかつ授業実施状況調査で回答が得られた科目に限られるものの、本分析で授業形態の変化が授業満足度に影響を与えたかを確認できる。

表 4：授業形態別の満足度（2020 年度 3Q のみ）

対面・オンライン科目別の満足度平均			
	対面のみ	オンラインのみ	対面とオンラインの併用
科目数	66	51	105
満足度指数	4.22	4.15	4.08

授業形態別の平均満足度は表 4 のようになった。次に、授業形態の影響を分析するために、表 4 のデータに対して一元配置の分散分析を行った（ $F(2,218) = 2.814, p > .05$ ）。結果から、授業形態の変化による授業満足度への影響には有意差があるとはいえなかった。



### 3.3 クラススケール別の満足度

続いて、1 科目のクラススケール（履修者数）に着目する。本学の1 科目あたりの受講者数分布は、最小1 人から最大では350 名を超える。このうち半数以上の科目は5 人未満となる。2020 年度は、履修者数の多寡によって授業の方針が変更になった科目も多かったと考えられ、これに伴って満足度にも影響が出ていることが推測される。

本稿では、履修者全体の分布を検討し、1 科目履修者数の分類を、「5 人未満」、「5 人以上 30 人未満」、「30 人以上 75 人未満」、「75 人未満」の4 つに設定した（表 5）。

表 5：受講者数分類別の科目数

	2017	2018	2019	2020
5人未満	1,254	1,281	1,404	1,074
5人以上30人未満	1,224	1,218	1,227	1,142
30人以上75人未満	1,353	1,355	1,373	1,249
75人以上	588	579	585	595

表 6：受講者数分類別の満足度（平均）

	2017	2018	2019	2020
5人未満	4.56	4.53	4.55	4.57
5人以上30人未満	4.31	4.35	4.35	4.29
30人以上75人未満	4.09	4.14	4.14	4.13
75人以上	4.07	4.07	4.10	4.08

表 6 には分類別の平均満足度を示した。これを見ると 2019 年度から 2020 年度における満足度の変化は、「5 人以上 30 人未満」の科目で 0.1 ポイント程度低下しているが、他の分類では大きな変化はないことが分かる。ただし、これとは別に、履修者数の増加に従って段階的に満足度平均のベースが下がっていることが見て取れる。

そこで、科目別の履修者数を X 軸、科目別の平均満足度を Y 軸におき、散布図を作成して傾向線を示した（図 4）。結果としては、各年度において履修者数が増えるほど満足度が下がっているように見えるものの、いずれのモデルも決定係数  $R^2 < 0.1$  であったため、履修者数によって満足度を説明できるものとはならなかった。

以上より、授業満足度の変化をクラススケール

で分析すると、いずれの分類も年度推移による大きな変化はなかったと結論付けられる。

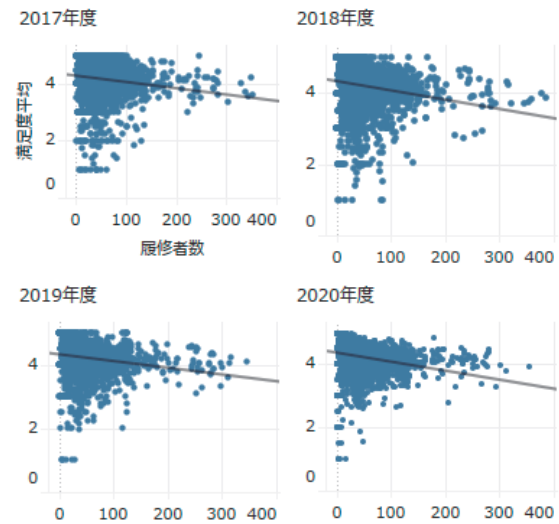


図 4：科目別の履修者数と平均満足度の関係

### 3.4 学年別による満足度の変化

授業満足度について、最後に学年別の比較を行う。ここでは、これまでの科目ベースではなく個人ベースのデータを使用する。よって、以下に示す分析結果は個人別の満足度に焦点が当てられている。

2020 年度の授業形態変化は、本学の全学生に多大な影響を与えたが、例えば新入生と在校生では置かれた状況が異なるため、学修成果に質的な差があるということも考えられる。本節では、認定学年別に平均満足度を比較することで、下級生や上級生といった立場の違いによる学修への影響を確認する。

図 5 は、アンケート実施時点での認定学年別の満足度平均を示したものである。図中の上段ではアンケート年度当事の認定学年が1 年生から3 年生まで、下段では4 年生から6 年生のそれぞれの推移が示されている。

図 5 上段では、1 年生から3 年生それぞれが各年度とも満足度 4.1 前後を示しており、概ね安定した推移が認められる。また、懸念されていた 2020 年度の1 年生に関して、満足度の落ち込みといったネガティブな状況も確認されなかった。

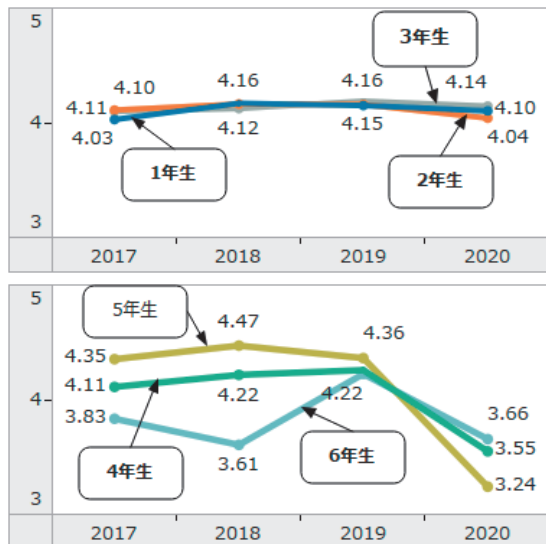


図5：上級生（3～6年生）の平均満足度推移

続いて、図5下段の4年生から6年生について確認する。本学では医歯薬系学部の一部学科で6年制が採用されているため、該当する学科を対象に5年生と6年生が図示されている。

これを見ると、いずれの学年も2019年度から2020年度へ移行した際に推移が落ち込むことが分かる。この中で、5年生に関しては差が1.0ポイント以上となっており顕著な落ち込みが確認できる。また、卒業見込み生となる4年生や6年生に関しても差が0.6ポイント前後となっており、5年生同様に見過ごせない状況である。

以上、本節では個別データをベースにそれらを学年別に分類しながら平均満足度の推移を分析した。その結果、1年生から3年生は各年度とも満足度の推移が概ね安定していた。逆に、卒業見込み生を含む4年生から6年生については、2020年度に明らかな落ち込みが確認された。

### 3.5 授業外学修時間の変化

本節では授業外学修時間についての分析を行う。授業外学修時間については、授業アンケート上の設問5において8つの回答項目から選択する形となっている。分析では、各回答項目を表7のように便宜的に時間変換することで学修時間を算出した。また、設問文にも記されているように、ここでの授業外学修時間には授業後の課題について取り組む時間だけではなく、授業前の予習等の時間

も含まれている。

表7：授業外学修時間の変換

設問5：この授業においては、教員に指示された課題についての授業時間以外の典型的な週平均学習時間はどれくらいでしたか。（予復習やレポート、授業関連の読書、調べ物等を含む）		
回答番号	選択肢	変換後（h）
1	0分	0
2	30分未満	0.25
3	30分以上1時間未満	0.75
4	1時間以上2時間未満	1.5
5	2時間以上3時間未満	2.5
6	3時間以上4時間未満	3.5
7	4時間以上5時間未満	4.5
8	5時間以上	5.0

2020年度は、学生視点で「課題が多い」という意見を様々な場面で耳にする機会が増えた。要因はいくつか考えられるが、一つには授業形態の変化によって多くの様式が変更されたことで、学修量的な部分に影響があったのではないかと推測される。しかし、果たして定量的な観点から授業外学修時間は増えたといえるのだろうか。

図6は、授業アンケートの対象科目別の授業外学修時間（週平均）を箱ひげ図にプロットしたものである。ここでは、後述の図7と比較がしやすいように縦軸の最大値を5時間と設定している。

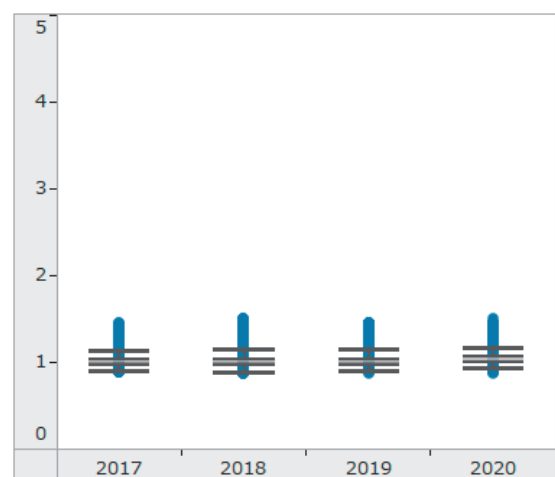


図6：科目別授業外学修時間（h/週）の分布

この中で、科目別授業外学修時間の平均値分布とは、ある科目の事前事後の学修量がどのようにマネジメントされていたかと言い換えることができる。つまり、図6は内容や方法はともかくとして、各授業ベースでどの程度の課題が出されたか、もしくは予習・復習はどの程度必要とされていたかという部分の平均的なマネジメントの時間と考えられる。

図6を見る限りでは、2017年度から2020年度にかけて大きな変動は見られない。また中央値に関しても、いずれの年度も0.99から1.0の間に収まっている。

以上より、2020年度に授業環境が大きく変わっても、授業1回の課題量や予習、復習すべき内容量に関して大きな差はなかったものと考えられる。

次に、図7で個人別の授業外学修時間(週平均)の状況をみる。図7は、図6で使用した同じデータを学生個人に組み替え、さらに学年別でプロットしたものである。5年生や6年生については、4年生までと比較してデータ数が大幅に少なくなるため、ここでの掲載は控える。

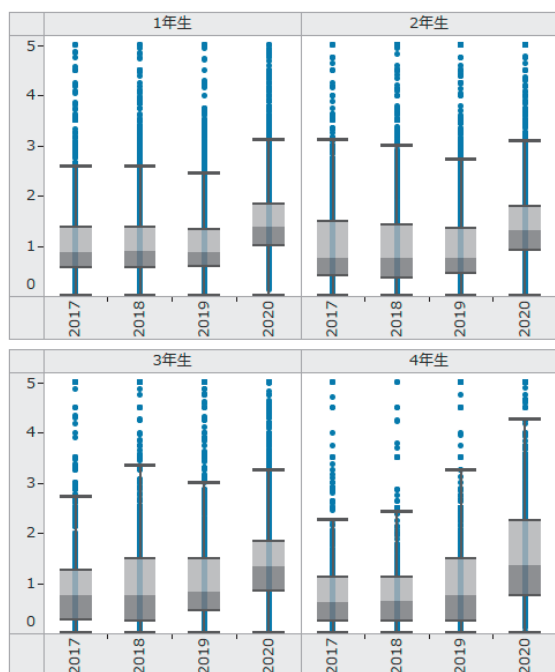


図7：個人別授業外学修時間（h/週）の分布

授業アンケートでは、各学生が履修した科目が多いほど回答するアンケート回数も多くなる。ただし、回答は任意であるため学生それぞれの回答

状況は異なる。よって、例えば1科目しか回答していない学生で、たまたま学修時間を高めに回答した学生はその時間が平均時間として算出される。このような理由から、個人ベースの算出では学修時間の分布に幅が出ることが想定され、実際に図7でもそのような傾向が見られる。

図7の結果を見ると、2017年度から2019年度の比較では差が見られないが、2020年度は過年度と比較してどの学年についても分布的な差が認められた。

表8：個人別の授業外学修時間（h/週）中央値

	1年生				2年生			
	2017	2018	2019	2020	2017	2018	2019	2020
中央値	0.88	0.89	0.88	1.39	0.75	0.75	0.75	1.30
	3年生				4年生			
	2017	2018	2019	2020	2017	2018	2019	2020
中央値	0.75	0.75	0.83	1.34	0.63	0.64	0.75	1.36

表8は、図7をもとに個人別の中央値を示したものである。図7で2020年度と他の年度では差が見られたが、表8の中央値を比較する限りでもその差は明らかな状況である。2020年度と他の年度との中央値の差は、1年生で約1.6倍程度、2、3年生で約1.7倍程度となり、4年生では約2倍前後となる。

図6、図7、表8の一連の分析を総合的に検討する。図6からは、科目ベースにおける学修時間のマネジメントに大きな変動がなく、かつ安定していることがわかった。これに対し、図7や表8では個人ベースで、特に2020年度に授業外学修時間が全学年で増加したことがわかった。

### 3.6 授業外学修時間と成績の関係

続いて、授業外学修時間と成績の関係について分析する。本学の成績付与については、絶対評価を用いることが規定により定められている。つまり、各学生における成績を相対的ではなく個別で評価することが求められている。これに対し学生側は、高い成績評価を得るためには、各々が適切な学修時間を費やすことで授業内容についての確かな理解度を深める必要がある。よって個人差はあるにせよ、授業外学修時間と成績の間にはある一定の相関が伴うと考えられる。

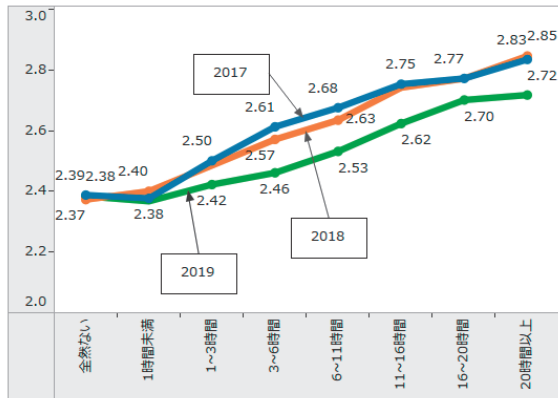


図8: 授業外学修時間と累積 GPA の関係

図8は、授業アンケートをもとに算出した一週間の授業外学修時間（累積）と、各学生の年度時点における累積 GPA の関係を示したものである。ただし、2020年度の指標に関しては、本稿執筆時点でデータが揃わないため表記していない。

結果から、各年度とも授業外学修時間が長い学生ほど成績に結びつき、学修成果が高くなることが見出された。このことは、本学において成績評価が適切な状況であるとともに、学生による授業外学修時間が正常に機能していることを示している。

### 3.7 「意欲」、「触発度」、「協働」について

本節では、設問4、6、7より、「課題に対する意欲」や「授業による学修への直接的な影響」、さらに「協働作業への取り組み」といった部分について学生の意識の変化を確認する。

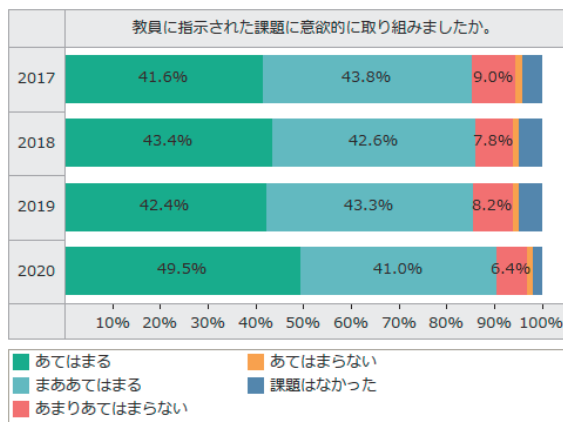


図9: 課題への意欲の割合

図9では、教員から課された課題について学生がどの程度意欲的に取り組んだかを質問している。この中で、2020年度において「あてはまる」、もしくは「まああてはまる」と回答した学生の割合の合計は、過年度より5ポイント程度伸張し、この2つの項目だけで90%以上に達している。また、同じく「課題はなかった」と回答した学生も過年度より3ポイント程度減少してわずか2.0%の実績となっている。

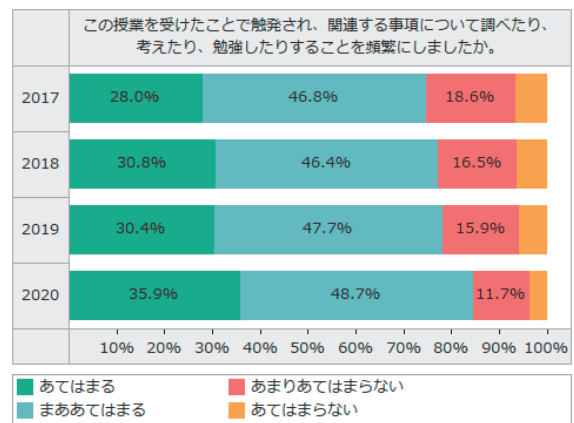


図10: 授業から受けた学修への触発度

図10では、授業を受けることで学習意欲が向上したかについて質問している。この中で、2020年度において「あてはまる」、もしくは「まああてはまる」と回答した学生の割合の合計は、過年度より5ポイント程度伸張しており、前述の図9と近似的な傾向が示された。

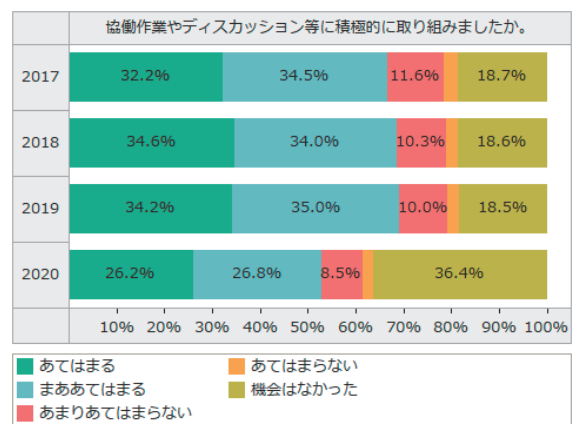


図11: 共同作業に対する取り組み

図11では、授業に関連して行われるディスカッ



ションや協働作業にどの程度積極的に取り組んだかについて質問している。ここでは、「機会がない」の回答が過年度の約 2 倍の割合に増加しており、2020 年度に起きた一連の影響が授業関連のディスカッションや協働機会に大きな影響を与えたことが示唆されている。

次に、これらの協働機会の喪失が身につけるべき能力の獲得にどのような影響を及ぼしているかについて分析する。

図 12 は、2020 年度に限定して授業アンケート設問 8 の結果を示したものである。この中で設問 7 の共同作業やディスカッションに積極的参加をした、「あてはまる」、「まああてはまる」の選択グループと協働の「機会がなかった」と選択したグループについて能力の獲得状況の比較をしている。

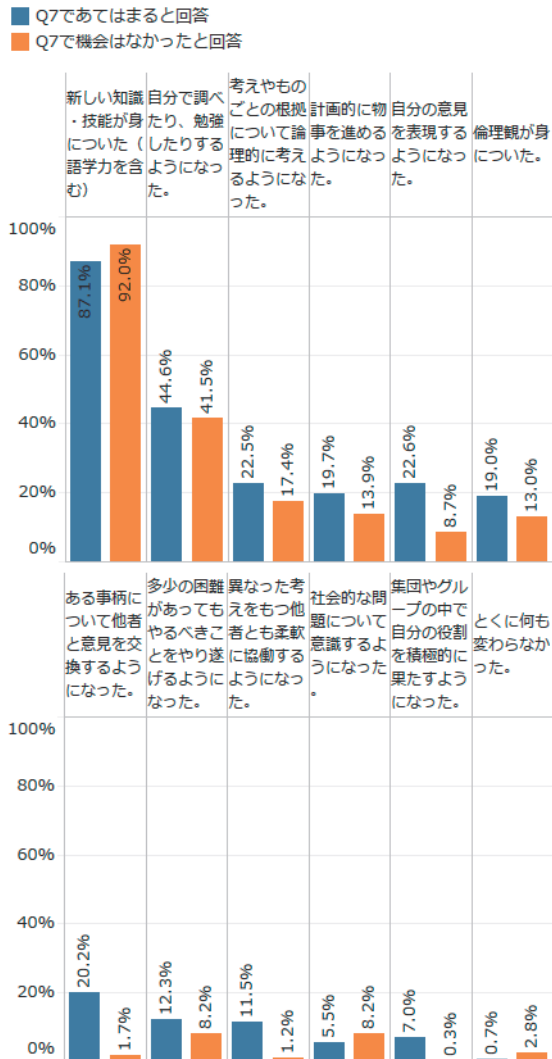


図 12：身についた能力の状況（協働機会別）

図 12 では、設問 7 において「機会がなかった」と回答したグループは、「自分の意見を表現するようになった」、「ある事柄について他者と意見を交換するようになった」、「異なった考えをもつ他者とも柔軟に協働するようになった」、「集団やグループの中で自分の役割を積極的に果たすようになった」といった選択割合が顕著に低かった。また、「新しい知識・技能が身についた」、「社会的な問題について意識するようになった」については、「あてはまる」の回答グループより選択割合が若干高い結果となった。

#### 4. 考察とまとめ

本稿では、本学で実施されている授業アンケートについて、導入時点の 2017 年度より現 2020 年度までの結果を比較した。

回答率を確認すると、初年度となる 2017 年度で 20%程度と低かった回答率が 2020 年度には 65%を超えるほど上昇した（表 3）。今後は、現状を維持しつつ回答へのモチベーションが低い層を如何に取り込むかが課題となる。

続いて、授業満足度について考察する。全学科目ベースでは授業満足度は堅調な推移を示したものの（図 3）、個人ベースで分析すると、2020 年度の 4 年生以上の学生に満足度の落ち込みが確認された（図 5）。このことは、長く対面ベースの授業を経験してきた学年ほど、学修への影響が大きかったことが示唆されており、卒業に近い上級生ほど新たな授業形態への適応が難しかったのではないかと推測されるものとなった。

一方で、1 年生から 3 年生までについては 2020 年度の落ち込みは確認されなかった（図 5）。単純には、下級生の授業満足度が堅調であったということになるが、指標に表層化していない潜在的な部分を検証できていないため、早計な判断はできない。

いずれにせよ、定量的な分析だけでは指標の内容構成まで把握することは難しい。今後は、設問 9 から設問 12 のような自由記述回答を分析するなどして、授業満足度の要素を検証していく必要がある。

授業満足度については、授業形態による満足度

の違いやクラススケールでの違いについても分析を試みた。どちらの分析においても、一定的な傾向が読み取れるものの、それぞれに統計的な有意差は確認できなかった。ただし、授業形態による満足度の差はデータがごく限られた期間であったため、改めて期間を拡大して検証する必要がある。

次に、授業外学修時間について考える。本稿では学修成果の可視化を優先させるという観点から、例えば大学設置基準を前提とした授業外学修時間の確保といった議論は行わなかった。

まず、授業外学修時間と成績についてその関係性を確認すると、2017 年度から 2019 年度のいずれの年度においても両指標間に適切な状況が確認できた（図 8）。つまり、授業や課題に対して学生が一定以上の努力を重ねることが、高い成績評価を取得する必要条件になっているといえる。

中島（2019）は、本学における授業外学修時間の調査結果の一つとして、GPA が高い学生の方が授業外学修時間も長いことを明らかにしている。調査手法や分析手法こそ異なるものの、本稿でも同様の状況が確認できる形となった。

以上のような状況について、現状での問題点は特にない。大学としては同様の運営を継続的に維持していく必要がある。2020 年度に関しては、データの都合上分析ができなかった。今後、授業環境の変化が上記の関係性に何らかの影響を与えていないかどうかについては改めて検証する必要がある。

続いて、授業外学修時間の変動について考察する。図 6 および図 7 によると、授業外学修時間は科目ベースでの変動は少なかったものの、個人ベースでは 2020 年度に伸張していたことが判明した。このことは、授業環境の変化が授業そのものの全体量や、課題の総量に大きな変動をもたらさなかったということを示しており、対して、それらを課された学生側への影響は大きかったことが明らかとなった。

オンライン授業が増える過程で、受講スタイルやレポート提出に至るまで多くの要素が変化した。このような変化に対してやはり受け手である学生側に多くの対応が求められる形となり、結果として彼らの負担が増したと推測される。

本学の課題としては、授業外学修時間の伸張という結果より、現状では学修時間に個人差が拡がりつつあるという本質的な側面に注意を向ける必要があるのではないだろうか。

最後に学生の意欲や獲得した能力といった部分に目を向ける。図 9 や図 10 より、学修意欲や自主性に関するポジティブな回答割合は年度によって落ち込みを見せることはなく、新型コロナウイルスの影響後に至ってもむしろ伸張している。外出や自粛を求められる期間が長かったため、授業により向き合う他なかったとも考えられるが、つらい状況が続く中、教職員、学生の双方が学修への意欲を喪失させないように数多の努力をした点について率直に称えるべき結果といえる。

残念ながら、協働の機会については、「機会がなかった」と回答した割合が大幅に増える結果となった（図 11）。また、協働作業に積極的に取り組んだ学生と、その機会がなかった学生とでは獲得したといえる能力の選択率に差が生じていた（図 12）。具体的には、表現能力やディスカッション能力、他者への理解といった回答項目に大きな選択差が見受けられた。状況的に仕方のない部分も多いが、オンライン授業を行いつつ協働作業を生み出せるような手法を何とか見出していければと期待される。

以上、本学の授業アンケート結果について 2017 年度から 2020 年度まで比較した。全学的には何か緊急性が問われるような状況はないといえる。しかし、指標によっては、特に 2020 年度に多少の影響が見受けられる部分があり、これらの推移を今後は注視していく必要がある。

最後に今後の課題を示す。分析に関しては、その粒度や分類についてさらに検討する必要がある。例えば、学部別の分析といった視点は本稿では取り上げられていない。大きな母集団のみで分析を続けると時に判断を誤ることがある。よって、今後も様々な視点から分析を試みつつ、総合的な考察を重ねていく必要がある。

また、今回の分析では選択式の項目を中心に定量的な分析に終始した。これでは指標が示す内容構成について明らかにすることができない。この点を補完するためにも、今後は設問 9 以降の自由

記述回答の分析にも着手する必要がある。

#### 参考文献

- 1) 中島ゆり (2019). 大学生はいつ学習しているか  
長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要,  
10, 21-31.